

日本臨床外科学会 国内外科研修報告

大阪大学消化器外科での研修を終えて

福井県済生会病院外科

島田 雅也

「速報 豪雪のため国道8号線1,500台立ち往生」平成30年2月6日～16日の約2週間の日本臨床外科学会国内外科研修のため、なんとか遅れて運行していた特急サンダーバードに飛び乗り向かった研修先の大阪で飛び込んできたニュースでした。私の出身かつ勤務地である福井県は雪国でもあり、研修期間を2月に選んだのも、曇天の寒空の下での生活から少しでも逃亡したいという下心はありましたが、まさか本当に災害とも言える豪雪から「逃亡」することになるとは思ってもみませんでした。

かくして若干後ろ髪を引かれるような思いの中、私の国内外科研修が始まりましたが、もともとの応募動機は、食道手術についての知識経験を深めたいという思いからでした。私は、平成16年金沢大学卒で、現金沢大学先進総合外科(旧第一外科)に入局し、現在の福井県済生会病院にて上部消化管外科として勤務しております。しかしながら、北陸地方全域に言えることですが、人口が少ないことも一因として食道癌症例が非常に少なく、特に手術適応となる症例は一般病院では年間数例、大学病院など基幹病院でも年間十数例に留まっています。医局の先輩方の手術を観たり勉強会に参加し、技術や知識の向上に努めてはいたものの、ただでさえリスクの高い食道手術で、ガイドラインに完全に準拠した症例でどうか安全に周術期を乗り越えることで精一杯な状況です。なにか次なるbreakthroughを切望していたそんな折、本研修協力施設リストに年間100例を超す食道癌手術をしている大阪大学消化器外科を見つけ、迷わず応募させていただきました。

大阪大学消化器外科食道チームは土岐教授以下4人のスタッフを中心に、週2～3件の食道関連の手術をこなし術前化学療法も含めると常時30人もの病棟患者を診療しています。驚いたのは、その患者数もそうですが、難解な症例・ハイリスク症例に対しても、あくまで「手術での根治を中心に据えた集学的治療」を目指し実現させているところでした。週2回、術前患者と入院患者全員について濃密なチームカンファレンスを行い、高難度の切除・再建手術、先進的な化学療法の治験症例について活発な議論が行われていました。術前化学療法から手術までの間隔や、二期的手術の間隔のテンポ感が良く、百戦錬磨ならではの勘や経験から来るであろうと思われる、腫瘍因子と患者因子が交差する「今しか手術できない」という絶妙なタイミングで手術が決定されます。内科や化学療法科の先生方とのカンファレンスにも参加させていただきましたが、外来には次々と周辺の関連病院から一筋縄ではいかない進行癌や併存症を抱えた症例が紹介されてきており、先生がたは大阪地区での最後の砦である使命感を持って診療に当たられていることがひしひしと伝わってきました。

私が最も学びたかったのは、まさにそのような難解な症例での胸腔鏡下郭清手技と血行再建を伴う再建のコツでした。以前より、食道チームの准教授の山崎誠先生の講演での手術ビデオや論文での報告などを拝見する機会にはありましたが、それらは到底自分が付け焼き刃でできるものではなく、知識として持っているという程度に留まっておりました。今回の研修では、その一端に過ぎませんが極意を垣間見ることができました。また、左側臥位/腹臥位のいずれの胸腔鏡下アプローチでも、すべての再建方式も、患者の状況に合わせて万遍なく安定して施行でき、各々において精度を高めていくというチームとしての大きな目標が伝わってきました。

全てにおいて吸収すべきことではありましたが、最も印象に残った内容を紹介します。胸腔鏡下

縦隔郭清における食道テーピングテクニックでは、終始良好な視野とテンションが維持できているので、美しい解剖の理解や完璧な郭清ラインに釘付けとなりました。また、有茎空腸再建や回結腸再建の症例では、形成外科とのタッグを組んだ阿吽の呼吸での内胸動静脈でのSupercharge法を実際に観ることができ、私の趣味である音楽に例えるなら「何年も待ってようやく世界最高峰のバンドのコンサートのチケットを手に入れ、時が経つのも忘れて拳を振り上げる」と似た感覚に襲われました。手術以外にも、レジデントの先生においては、激務の中、手術前日には鎖骨下からの中心静脈カテーテルを、術前化学療法時には末梢挿入型中心静脈カテーテル（PICC）をルーチンで挿入されていると知り、そのような確実かつ滞りなく治療ができるシステムやチームワークが、縁の下の力持ちとなり効果的な診療に繋がっている印象を受け、頭が下がる思いです。文献や学会のダイジェストビデオにはみえていない、細部にわたる準備・職人的コツ・努力・チームワークといった部分で、自分の中のカベが音をたてて崩れていくようでした。一朝一夕には到底成し得ない分野ではありますが、今後指導する立場としても、目指すべきチームのあり方や医療レベルのひとつの形態として心に刻まれました。

また、もう一つの研修動機としては、胃外科チームでは、近年のトピックであります肥満外科手術を始められていることや、2018年4月から保険収載が見込まれているロボット支援手術も積極的に導入していると聞き、最新の診療状況を知っておきたかったこともあります。こちらも、黒川幸典先生や宮崎安弘先生にそれらのコツやピットフォールにつきご指導いただきました。いずれの手術も、軌道に乗り始めた段階のようでしたが、導入時の注意点や苦労点をはじめ非常に共感でき、私もいつか来るべき時のために身が引き締まる思いでありました。

以上、2週間にも満たないわずかな期間に、観てみたかった手術をほぼ見学でき、一通りのサブスペシャリティ専門医を取得した今の段階だからこそ知りたかったことや自分に足りなかったものがみえてきたように思いました。

最後になりましたが、お忙しい中親切に対応いただき御指導いただきました。大阪大学上部消化管外科 土岐祐一郎教授をはじめ 山崎先生・黒川先生・高橋先生・牧野先生・宮崎先生・田中先生、次世代内視鏡治療学 中島先生、親しくしていただきました医局の先生方や秘書の方々全員に深謝致します。今回の研修で、自分のさらなる目標や探究心の発掘につながり、得た見聞と交流は今後の臨床に直結し外科医人生の大きな財産となったと思います。今回このような貴重な機会を与えていただいた日本臨床外科学会と、ご推薦をいただきました福井県済生会病院外科主任部長宗本義則先生、不在中の診療をバックアップいただきました同外科スタッフの皆様にご心より御礼申し上げ、研修報告とさせていただきます。